

強制隔離された島の土で作った《骨壺》

2013年夏、私はハンセン病回復者で陶芸家の山本隆久さん（当時80歳）が「自分が入る骨壺」を作る姿にカメラを向けていた。隆久さんの“最期の時”を想像し、覚悟を持って向き合っていたはずの私を、現実は無情なく越えていく。

1980年代末にハンセン病療養所の中で陶芸を始めた隆久さんは、いつしか自分が“隔離された島の土”で作品を使うようになっていた。自分の人生を肯定するために。



この年、山本さんの口を度々ついて出てきたのが「《骨の棲みか》が定まらない」という言葉だった。

絶海孤島の国立療養所・大島青松園（香川県高松市）には故郷に帰ることができないお骨を納めるための納骨堂がある。しかし、療養所が終焉を迎えた時に誰が納骨堂を守り続けてくれるのか、見通しは立っていなかった（今も見通しは立っていない）。

69年間離れて暮らした故郷・徳島への想いもまた持ち続けていた。

作品《骨の棲みか》を作り上げることで、普段は心の奥底にしまい込み、なかなか語ることのない“心の声”が土の中から浮かび上がってくることを願った。窓の外から聴こえる蝉の声とブーンというろくろの低い音が、陶芸室の隆久さんとクルーを包み込んでいた。

ひと夏の間、隆久さんは4つの骨壺を作った。生湯きの骨壺に鉄の針で文字を刻み込みたいと言う。

『きたよ 一夫』。

一夫は、療養所で偽名を使って暮らしてきた隆久さんの本名だ。

「これ、おふくろに言うとなんじゃ。『お前を残して死ぬに死ねん』ってよう言いよったから。心配すなよ、『きたよ』って」。故郷のお墓に分骨してもらおうことを願って作っ

た骨壺だった。

納骨堂に納めるための骨壺には“辞世の句”を刻み込んだ。「最後はちょっと長うに“恨み節”をね」と軽口を叩きながら…

『^{うつしよ}現世を抜けて 無限を壺に棲む 隆久』。

「苦痛も、精一杯しんどい思いしたこの世をようやく抜けて、この壺の中で無限に生きますよってね」。

骨壺を前に、隆久さんは“本当の孫”のように可愛がってきた島の子ども、昂生くん（当時 18 歳）に語り掛けた。

「わしゃ、死んだらここで焼かれるけん。焼いたら骨一つ拾って、ここに入れてな。拾いに来てくれんといかんのよ」。

隆久さんの不意打ちに昂生くんは動揺した面持ちで、「“遠い未来”…」となんとか言葉を継いだ。

「“遠い未来”の話…、にしてやぁ…」。それは、私の願いでもあった。

それからわずか3年後の2016年8月19日夕刻のことだった。突然の訃報に驚くとともに「故郷に分骨してもらうための骨壺があることが、ご親族に遺言されていないのではないか」と気にかかった。21日告別式の朝、差し出がましいとは思ったが、療養所の職員の方に「骨壺はどうなったんですか」と恐る恐る尋ねた。「ご親族は昨日の時点では『京都のお寺に永代供養に出します』って言うってたんやけど…」。

やっぱりダメだったかと暗澹たる想いがした。

葬儀には、隆久さんと唯一つながりのあった4人のご親族が参列された。僧侶による読経の後、緊張した面もちで最後の挨拶に立った男性が、絞り出すように語り始めた。

「『骨壺を作りよったよ』と療養所の陶芸仲間の方が教えて下さいました。昨日、初めてその骨壺を見せてもらいました。骨壺には『きたよ 一夫』と刻まれていました…」。

目から涙が溢れだした。男性は深く息を吸い込み、一気に声を絞り出した。

「山本隆久を……、“本名・一夫”として故郷に連れて帰りたいと思います！」。

隆久さんの想いが、人生を懸けた作品が、親族の心を動かした瞬間だった。

大学生活のために県外に暮らしていた昂生くんは、告別式の朝に島に駆けつけた。離島の療養所には、入所者専用の火葬場がある。昂生くんはそこで、約束通り隆久さんのお骨を拾って納骨堂のための骨壺に納めた。

火葬場からの帰り道。空を見上げると、入道雲の合間に隆久さんとお母さんがふたりで微笑んでいる姿が見えたような気がした。

猪瀬 美樹（NHK）